

南北石炭交流：田川と釧路の博物館から

福本, 寛
田川市石炭・歴史博物館

石川, 孝織
釧路市立博物館

<https://doi.org/10.15017/16978>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 25, pp.47-66, 2010-03-23. 九州大学附属図書館付
設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【紹介】南北石炭交流

— 田川と釧路の博物館から —

一 はじめに

明治から大規模な採炭を行い、日本の石炭産業に多大な貢献を果たした筑豊炭田は、昭和三〇～四〇年代に閉山が相次ぎ、現在では石炭が過去の遺産となっている。一方釧路炭田では、筑豊炭田閉山後も石炭採掘は続き、太平洋炭砒（平成一四年に閉山）を引き継いだ釧路コールマイン（株）では、現在も坑内での採炭が日本で唯一継続されている。あわせて同鉱は、世界最高水準の総合力を持つ炭鉱技術を、ベトナム・中国などの産炭国へ移転を行う貴重な現場ともなっている。

田川市石炭・歴史博物館（福岡県）と釧路市立博物館（北海道）は、産炭地に所在する公立博物館としての特色を活かし、炭坑の歴史と文化を後世に継承すべく様々な活動を行っている。そして両館では、筑豊・田川は石炭産業の現在を、釧路は過去をお互いに学び合うことを目的とし、近年、石炭を介した交流を行っている。この博物館「南北石炭交流」では、双方の炭鉱地帯から見出された共通点と相違点を認識し、振り返っ

て自らの地域の特色をより鮮明に浮かび上がらせたいとも考えている。

これまで、学芸員同士の現地調査等に加え、平成二〇年度には釧路市立博物館にて筑豊の山本作兵衛炭坑記録画の展示会を行い、平成二一年度には、「北と南を結ぶヤマ——石炭産業の過去・現在」と題して、筑豊・釧路炭田を相互比較しながら紹介を行う企画展を共同で開催するなど、交流の成果の一部を公開してきた。両館共同で調査を進めるにつれ、筑豊と釧路を結びつける意外な事実も判明した。両者

福本孝織
石川寛



図1 釧路・筑豊（田川）位置図

は距離にして一五〇キロメートル以上も離れた地ではあるが、石炭を背景にした人々のつながりが確かにあり、改めて南北石炭交流の意義を感じることもあった。

本稿ではこれまでの南北石炭交流の成果の一部を報告させていただくが、具体的には、筑豊・釧路炭田の相違を確認した上で、両者をつないだ人々の交流を概観する。そして石炭の記憶を継承していく両博物館の活動から、南北石炭交流の今後の展望を整理していきたい。

二 筑豊・釧路炭田の相違点（福本・石川）

（一）歴史的背景

近世／明治中期／石炭輸送

九州北部の筑前国東部と豊前国西部にまたがる遠賀川流域では、すでに江戸時代から石炭が採掘され、藩の管理下で都市部や瀬戸内海塩田の燃料として流通していた。しかし近世の北海道において石炭は、まだ資源とは見なされていなかった。豊富な森林資源があり、人口も少ないことから、石炭を利用する必然性がなかったのである。記録としては、松前藩主松前邦広の第九子長広が著した「松前志」（一七八一年）の「タキイシ 此物東部クスリヨリ出ツ 黒フメナメラカナリ モエルコト薪ノ如シ 大和本草二所載石炭^{モイシ}ノルイナリ」という記載が北海道内の石炭に関するもっとも古い記録である。「クスリ」は、後の釧路のことである。その後も、最上徳内「蝦夷草紙」、谷元巨「蝦夷紀行」などにも、釧路の石炭が記録されているが、採炭は箱館（函館）開港まで待たなくてはならない。函館港に寄港する船舶、特に捕鯨船に薪水、そして石炭

を供給しなくてはならず、箱館奉行は一八五六年、オソツナイ（現釧路市益浦「若見浜」）での採炭を行った。なお、翌年よりシラヌカ（現白糠町「石炭岬」）へ、一八六四年には北海道南部の茅沼（現岩内町）へと移動する。明治時代に入り、釧路では工部省によりオソツナイでの採炭を再開した。実際は佐賀藩によって生産が行われたが、まもなく廃業している。

そして、石炭が重要な資源として位置づけられ、近代化の原動力として期待された。北海道では開拓史によって鉱物調査が実施され、石炭の埋蔵が確認された。釧路へも榎本武揚、所謂「お雇い外国人」であるライマン（後で詳述）が調査に訪れている。しかし、評価は高いものではなかった。開拓使の資源開発を担当していた榎本は明治六年に釧路地方を調査し、「釧路国白糠ヨリ厚岸迄ノ間炭脈断続ス白糠炭脈ハ水平ニシテ開採極テ便利ナレモ品位甚悪ク其用ニ適セス且運輸不便ナリ安政中幕府ノ下手ハ過拳ト謂フヘシ獺津内ハ炭質白糠ニ優リ岩内石炭ト伯仲スト雖モ炭脈十度ノ勾配ヲ写シ西方海底ニ入ルヲ以テ一大啣筒ヲ備ルニ非レハ開採シ難シ其容易ニ採取スヘキ者僅ニ二千噸ナルヘシ港湾ナク運輸不便ナリ」と、資源としてのポテンシャルの低さ、ポンプの使用や輸送の困難なども指摘している。換言すれば、それらを「釧路港の整備」と「海底採掘」により解決することで、釧路炭田の炭鉱は存立し得たと見える。

ライマンは明治七年に全道的調査の中で釧路にも訪れている。十勝から八月一二日昼、尺別に到着、同一五日にかけて釧路地方を西から東へ調査を行っている。海岸に沿って調査し、白糠では放棄された休坑を調査、知人・春島炭鉱での小規模な採炭（釧路商人が二三人の坑夫を派

遣しての採掘）を記録している。廃坑となっていたオソツナイの炭鉱では、炭層が北西に二〇度程傾斜していることを難点としてあげている。尺別く厚岸を釧路炭田（炭田）とし、オソツナイが有望だが、産出は地方の要求を満たすほどであろうとまとめている。³⁾

一方、すでに江戸時代より石炭採掘がなされていた九州北部の遠賀川流域には、豊富な埋蔵量に多くの人々の関心が寄せられた。日本坑法（明治六年発布）によって小坑区が乱立すると、その弊害を排除するために撰定坑区が設定され、あわせて海軍予備炭田が開放されると、明治二〇年代から大手資本が続々と筑豊進出を果たした。大手資本による生産規模の拡大により炭鉱技術の進歩が促進され、明治二五年には出炭量が一〇〇万トンを超え、わずか三年後の明治二八年には倍の二〇〇万トン突破と増加の一途を辿った。この遠賀川流域には石炭を紐帯とした地域概念「筑豊」が誕生し、すでに明治三〇年には、全国出炭量の約半数を筑豊炭田が占めるまでとなり、日本最大の炭鉱地帯となった。

筑豊の出炭量が増加するにつれ、それまでの遠賀川を介した川舟輸送が頭打ちとなり、明治二四年の筑豊興業鉄道開通（若松―直方）を皮切りに順次鉄道網が筑豊に敷設されていった。筑豊で採掘された石炭は西日本各地の駅へ輸送されるほか、特別輸送港となった門司港（明治二二年指定）や若松港（明治三七年指定）などの港を経由して、国内（主として関西方面）や海外（香港・上海など）へも運ばれた。

釧路炭田では、明治六年頃から海岸沿いで民営炭坑が採掘を行うようになったようだが、ごく小規模なものであった。本格的な生産が行われるのは明治二〇年代の安田善次郎による硫黄生産事業に伴う春鳥炭山開発まで待たなければならない。硫黄は当時、アメリカ合衆国への重要な

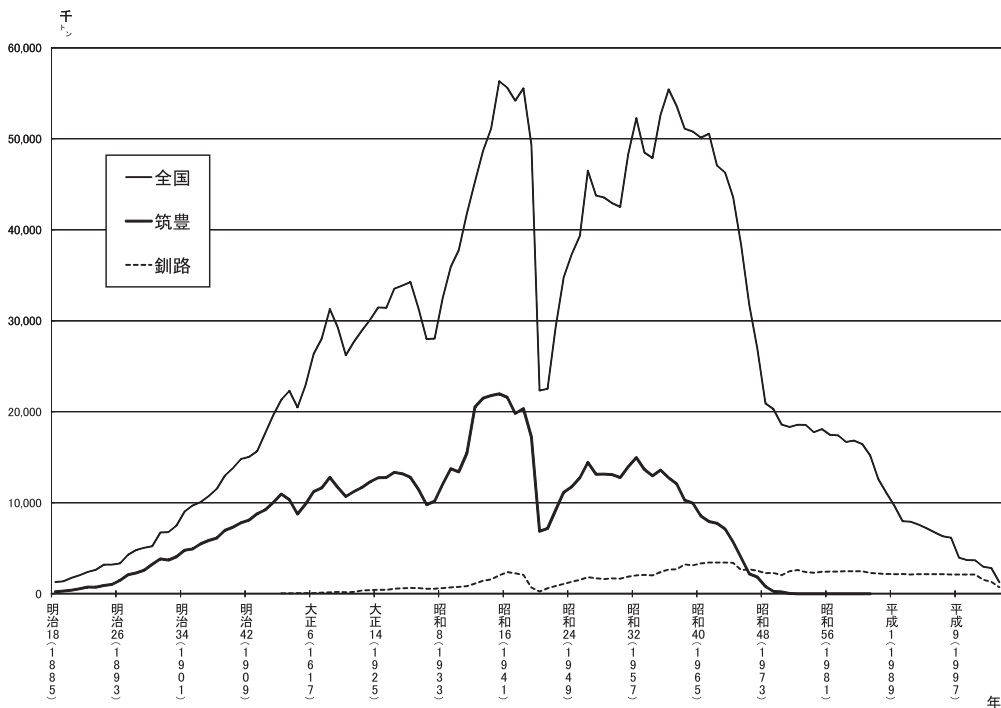


図2 筑豊・釧路炭田出炭量

(注) 1. 筑豊石炭鉱業会編1935『筑豊石炭鉱業会五十年史』、石炭業界のあゆみ編纂委員会編2003『石炭業界のあゆみ』、財団法人石炭エネルギーセンター・石炭技術協会、などの数値を参照して作成。

輸出産品であった。安田は硫黄採掘地であるアトサヌプリ（現 弟子屈町硫黄山）から精錬設備のあった標茶まで鉄道を敷設し（明治二十一年開通）鉱石を運搬、製品硫黄は釧路川での舟運により釧路港（明治二十二年特別輸出港、同三十二年普通港に指定）を経て輸出された。その硫黄精錬と蒸気船・鉄道のために石炭が大量に必要になったからである。明治二十九年にはこの硫黄生産は中止となるが、その後も春鳥炭山での石炭生産は継続された。明治三十一年には函館・根室間の定期航路を運航していた日本郵船への納炭が行われ、同三十二年には自社石炭専用船にて釧路・函館間の石炭輸送が、後には日本郵船との契約で京浜地区へも移出されるようになった。

一方、釧路地域での石炭消費は当初皆無に等しかったが、明治三〇年代後半には、前田製紙、釧勝興業・草野製軸・釧路製材造船などの製材製軸業での自家発電、官営鉄道の釧路・白糠間の開通、資源移出のために釧路港へ入港する船舶などへの供給など、地元消費も増加した。この頃は安田による春鳥炭山だけでなく、釧勝興業（別保）、昆布森、天寧、白糠の各炭坑でも生産が行われている。これらを背景に、明治三十一年には八千トン台であった石炭生産は、明治三〇年代後半以降はおよそ一万余トンから二万一千トンまで増加した。

明治後期、昭和戦中期／石炭資本の形態

筑豊では江戸時代中期頃から石炭が採掘されて明治時代に多くの炭坑が開発されたため、採掘場が次第に深部へと移行していった。明治後期には、地下二七〇メートルから三四〇メートルを超える大型堅坑が開削され、三井田川・三菱方城・製鐵所二瀬は明治三大堅坑と称された。その後、第一次世界大戦後の不況（大正七年）や撫順炭の影響などで石炭

不況が深刻化し、筑豊の各炭鉱では生産能率の向上や合理化が推進された。昭和時代になり太平洋戦争開戦前後の増産運動で、昭和十五年には全国出炭量五六三万トン（筑豊二〇四万トン⁴）の史上最高記録を樹立したが、戦時応召などで昭和二〇年には出炭量が激減した。

ところで、筑豊炭田における石炭資本のあり方としては、三井鉱山一社が独占した三池炭田に対し、三井・三菱・住友・古河といった大手資本に加え、いわゆる筑豊御三家と称された貝島・安川・麻生などに代表される大規模な地場資本が特徴である。大・中・小の多くの炭鉱が、遠賀川流域の狭い範囲に密集しており、その数は最大で二六〇鉱を超えた（昭和二六年）。そして筑豊の大きな特徴が、筑豊石炭産業者組合という同業者組合の存在である。筑豊石炭産業者の統制や炭鉱災害の防止など、主要炭鉱が加盟して協力的体制がとられていた。

ここで、釧路炭田での大手炭産資本の進出とその完成についてみてみる。

安田による春鳥炭山は、明治四五年には休山が決定した。日本郵船との契約の終了、北海道炭産汽船・三井鉱山・三井物産による価格支配の動きが進んだことが理由である⁵。その後、台湾で炭坑を経営していた木村久太郎が大正六年に買収する（木村組釧路炭産）。

この頃、北海道内では北海道炭産汽船（北炭）・三井・三菱により炭産の開発・買収がすすめられ、大正三年には三井鉱山・三井物産と、三井が支配を強めていた北炭による「北海道石炭販売組合」が結成されている。釧路炭田でも、大阪炭産（別保）が、後に釧勝興業別保炭坑も三井鉱山に買収されている。三井鉱山はより魅力のある木村組釧路炭産へ合併を再三にわたって申し入れ、大正九年には木村組釧路炭産（春採）

と三井鉱山釧路炭鉱（別保）が合併し、「太平洋炭鉱」（それぞれ春採坑・別保坑となる）が発足した。当初こそ木村が社長を務めたが、第一次世界大戦後の不況もあり木村は所有する同社株を三井鉱山へ譲渡し、大正一年から太平洋炭鉱の経営主体は三井が握ることになる。

一方で三菱は、大正八年に設立され、雄別の大祥内（阿寒村）で石炭生産を行っていた北海炭鉱鉄道（北炭とは無関係）を大正一三年に買収し、本格的に釧路炭田進出を行った。また尺別（音別村）で大正一〇年より本格的な生産を開始した北日本鉱業も昭和三年に、大和鉱業により大正七年から開発が行われていた浦幌炭山も昭和一年に買収している。この三井・三菱両資本の進出で釧路炭田炭坑の再編はほぼ完了したといえるが、筑豊で起業した明治鉱業も、やや遅れて昭和一三年に庶路（白糖町）の鉱区を買収し、翌年庶路炭鉱が開坑、また同一六年に庶路本岐炭鉱から本岐炭鉱を買収し、これで釧路炭田の大手炭鉱が出そろうことになる。

釧路炭田は三井・三菱・明治による大手炭鉱と、その隣接地や、開坑と閉坑を繰り返す白糖、炭層が比較的薄く大規模開発に向かない釧路東部から厚岸にかけてといった小規模炭坑とにおおよそ区分される。太平洋炭鉱春採坑を除けば、そのほとんどが森林資源収奪でのみ人の手が加わったといえる奥地にあり、また大手炭鉱資本により鉱区の設定と買収による集約が進んだことなど、筑豊炭田とは対照的である。

釧路炭田の出炭量は、太平洋炭鉱発足年である大正九年には二二万二千トンであったのが、昭和一五年には二〇二万七千トンと飛躍的に増加している。その後は他炭田と同様に生産資材の不足、労働力の不足と未熟練労働者の増加により生産量は減少に転ずるが、昭和一九年八月の

「急速転換」（後で詳述）によって釧路炭田の各炭鉱は保坑・休坑となり、生産量は激減する。

昭和戦後期／現在／閉山の状況

戦後は経済復興のため、筑豊の出炭量も次第に上昇。朝鮮戦争勃発による特需景気により、昭和二六年には戦前の水準に迫った。しかし、昭和三〇年代以降、エネルギー革命と石炭不況による政府の石炭合理化政策の波が筑豊を直撃。大手炭鉱では深部堅坑の開発で体質改善を図ったが、坑道の老朽化や採掘条件の悪さなどが原因となり、機械による合理化が困難で生産能率も向上せず、筑豊の炭鉱は次々と閉山した。昭和三一年で北海道全体の出炭量が筑豊を越え（筑豊約一三九六万トン、北海道約一四八五万トン）、昭和四六年には、ついに釧路炭田が筑豊を上回るに至った（筑豊約二二九万トン、釧路約二六九万トン）。昭和四八年、貝島大之浦炭鉱で坑内掘が閉山し、昭和五一年には同鉱の露天掘も終焉して、筑豊炭田の灯は完全に消え去ってしまった。

戦後の釧路炭田は、戦時中の「急速転換」により筑豊および三池炭田へ配転されていた炭鉱労働者は釧路へ戻り、戦時中に撤去された炭鉱設備を整備し、生産を再開させた。また傾斜生産方式で炭鉱には物資が豊富に供給されたことから、多くの労働者が炭鉱に集まった。しかし、急速転換により保坑・休坑となっていたため生産設備復旧に時間がかかったことから、他炭田に比べて生産量増加のペースはやや遅い。昭和二五年によろやく一五〇万トンまで回復し、再び二〇〇万トン以上の生産となるのは朝鮮戦争後の不況を経た昭和三年まで待たなくてはならない。

大手炭鉱では、太平洋炭鉱が昭和二年より海底下への展開を開始、同一四年に海底下の機械化炭鉱である興津坑が発足した。一方で採算性

が悪かった別保坑を同年閉山させた。陸部で有利な炭層を大方掘り尽くしたことから、この転進で若返りを図つたのである。この海底下採炭の成功と、後述する高度な機械化・合理化により、太平洋炭砒は高効率な炭砒としての地位を確固たるものにした。昭和三六年に一〇〇万トン、同三九年に一五〇万トン、そして四四年には二〇〇万トンと順調に生産量を増大させていった。

雄別炭砒は、雄別・尺別・茂尻（石狩炭田）の三山体制で生産が行われ、機械化も進み昭和三九年には雄別炭砒で七二万六千トンの生産となった。昭和三八年からは上茶路（白糠町）での新砒開発を開始、同四一年から生産を開始した。しかし、予想に反して条件は悪く生産は伸びなかった。そして第四次石炭政策による「企業ぐるみ閉山」を選択し、雄別炭砒（雄別・尺別・上茶路）は、昭和四五年二月に閉山、現在は無人集落となっている。

明治砒業では、庶路炭砒で昭和三六年に豎坑が完成したが、その効果は余り得られないまま昭和三九年に閉山、本岐炭砒も同四四年に閉山する。

昭和四二年に釧路炭田は史上最高の三四四万六千トンを生産するが、この雄別・明治の閉山によりその記録は再度上回ることはなかった。以降、釧路炭田はほぼ太平洋炭砒一山のみとなったといえる。

その太平洋炭砒も、昭和四七年前後には閉山も検討されることもあったが、翌四八年の第一オイルショックが強力な追い風となり、あわせて公害対策にも好適な低硫黄炭であることもそれを後押しした。その後、昭和五〇年代はおよそ二四〇～二五〇万トン水準の生産が続いた。なお同五二年の二六一万トンは同炭砒史上最大の生産である。昭和六〇年代

以降は二一〇万トン水準での生産が行われるが、円高の進行も含め石炭の内外価格差は拡大する一方で、九州や道内の他炭砒は次々と閉山する中、太平洋炭砒はさらなる合理化・機械化を進め、また保安の向上に努めた。しかし、石炭政策の終了する平成一三年度ついに閉山となり、現在は規模縮小の上、地元資本による「釧路コールマイン」が引継ぎ、現在は五五万トン体制での生産と「産炭国石炭技術高度化事業」の受託等を行っている。

（二）炭層と炭砒技術

炭層

筑豊の石炭は、遠賀川流域に発達した古第三紀層に含まれる。古第三紀層は砂岩・頁岩・礫岩の互層からなり、炭層がその間に幾層もはさまれる。地層の走向は北北西より南南東に走り、炭層傾斜は略東に平均一八度前後だが、東部の花崗岩の隆起では、六〇度以上の急傾斜も見られた。

主要炭層は上部から遠賀累層、竹谷累層、三尺五尺累層、大焼累層に分かれ、各所で断層や花崗岩の隆起により分断されている。なお、強力な火山岩の噴出で石炭が変質した燧石や無煙炭も一部で産出し、筑豊炭田の特産物となった。

筑豊の炭層の特徴は、傾斜をもつた重層構造をなすことである。炭丈もいわゆる「尺無層」と呼ばれるものから、田川八尺層（二・七六メートル）・田川四尺層（一・九二メートル）のような炭層もあった。また、筑豊炭は比較的カロリーが高く（田川八尺層は六八〇〇カロリー以上、田川四尺層は七二〇〇カロリーなど）、特に田川炭は質の良い石炭とし

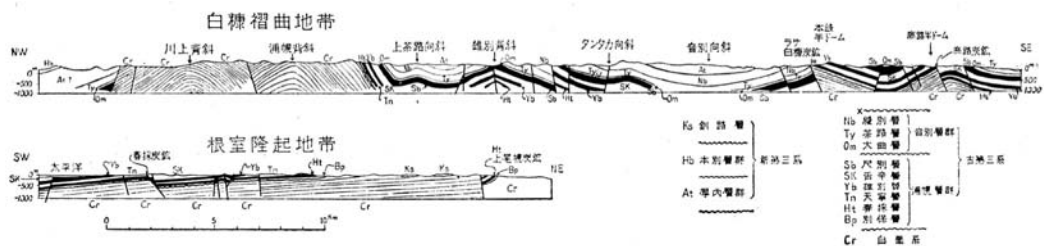


図3 釧路炭田地質断面図 (注) 1. 東京地学協会1960『日本鉱産誌 石炭』34頁より

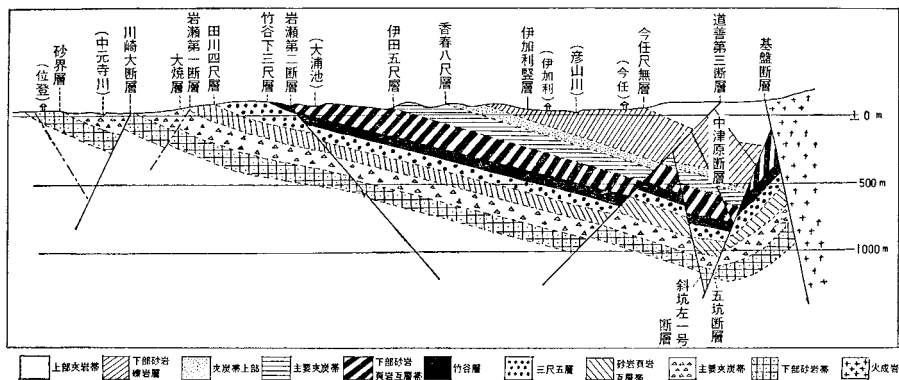


図4 筑豊(田川)炭田地質断面図 (注) 1. 田川市史編纂委員会1974『田川市史 上巻』89頁より

て有名だった。

釧路炭田は、東西一〇キロメートル、南北二〇〜六〇キロメートルの広がりを持ち、主要夾炭層は古第三系浦幌層群の春採層、天寧層、雄別層、尺別層である。ただし、各層に経済的に稼行対象となる炭層は、ないし二層しかなく、その層厚は一〜二メートル程度である。しかも大部分が非粘結性亜瀝青炭であり、発熱量も春採層で六一〇〇カロリー程度、の一般炭で、我が国の主要炭田の中ではやや「劣る」とされる。釧路炭田は石狩炭田の上部に対比されるが、それに比して石炭化度は進んでいない。地質構造を比較すれば、石狩炭田は複雑であり、より大きい構造運動を受けてきたことを示している。

炭田の西部(雄別・尺別・浦幌)では、北東―南西方向の背斜やドーム構造が見られるが、釧路市南部では緩傾斜で海底に連続し、太平洋炭砒では断層は見られるものの、稼行対象層は約六度の緩やかな傾斜であることがその生産を有利にしている。また、非粘結性で低硫黄であることはボイラー等での利用に向いており、その点では「低公害の高性能炭」ともいえる。

炭鉱技術(炭鉱の機械化)

技術全般について述べるには紙幅が不足するため、ここでは特に切羽の機械化について、筑豊と釧路を比較してみたい。

なお、手掘り採炭時代は、筑豊では基本的に男女二人が一組となり、男性(先山)が鶴嘴で石炭を採掘し、女性(後山・後向)が石炭を掻き出してバッテリー(竹製のザル)、テボ(背負籠)、スラ(木箱)によって切羽から主要坑道まで運び出す。釧路における明治期の採炭も当然人力であり、片ツルのち両ツルが使用された。先山がツルハシで採掘し、後

山が「パイスケ」（背負い箱）や「スラ」に積み、主要坑道のトコ（トロッコ）まで運んだ。スラ箱は後にコロ（ローラー）が使われるようにもなった。先山と後山は身内が多く、筑豊と同じく夫婦が、あるいは親子であった。また、当時の服装については、筑豊の坑内は湿気が高く蒸し暑いので男女とも素肌をさらして石炭を採掘していたが、北海道・釧路では、場所によっては気温と湿度が低いため、作業服を身にまとい腹掛を着けることもあった。

石炭の採掘方法では、いわゆる「残柱（炭柱）式」から「長壁式」への転換が一つの指標である。筑豊では明治二四年に三菱鯉田で初めて、坑道の両側に安全炭柱を残置する残柱式長壁法が導入された。以後大手炭鉱を中心に両者を折衷した採掘方法が広がり、大正三年の第一次世界大戦前後に残柱式から長壁式へ転換していく。明治四〇年には三井田川で安全炭柱を残さない総払式長壁法が採用され、翌年には三菱新入などで筑豊各地に導入される。

釧路炭田では、木村組釧路炭硯時代（大正六〇九年）から「上層」の面長三四メートルの長壁式採炭が行われている。「本層」については太平洋炭硯初期である大正一五年に長壁式での「全層払い」が試行されているが、採掘跡の処理に困難があり、「全層払い」は短壁式採炭で昭和五年に成功している。長壁式は、追って四五メートル、六〇メートル、そして一五〇メートルの切羽を二分しての七五メートルへと発展していき、昭和九年のゲートコンベア、昭和一二年の切羽コンベアの完成により石炭搬出の欠点も解消され、一五〇メートルの長壁式切羽が稼働、これにより戦前の採炭法が確立された。⁷⁾

ところで、明治四〇年の筑豊における重要炭鉱六八坑において、鶴嘴

採炭は六〇坑、発破採炭は七坑だったが、三菱方城では他の炭鉱に先駆けて、すでにコールカッターを使用していた。⁸⁾ コールカッターは棒回転式とチェーン式に大別され、筑豊の大手炭鉱では棒回転式のもの明治四〇年代より導入されている。チェーン式は明治四〇年に三井田川で初めて使用されているが、不慣れのためすぐに使用を中止し、大正一二年同伊田斜坑においてようやくチェーン式の優秀性が認められ、各炭鉱へ普及していく。しかし、このコールカッターは、重量があり使い勝手もあまりよくないため、三井田川では「牛」と呼ばれてあまり重宝されておらず、同鉱では発破による採炭に重きが置かれていたようだ。

切羽運搬について、筑豊では大正二年に三井田川伊田坑でハンキングコンベヤーを導入、大正五年には第一坑にローラーコンベヤーを設置して切羽の機械化を図り、優先切羽より後山が廃止されて、積込能力増加のため用具も漸次スコップにかわっていった。水流しシュート（樋）については、大正八年に三菱の各炭鉱で水流し法が採用されている。昭和二年、三井山野の技師・加藤要一郎考案の「山野式チェーンコンベヤー（環鎖式運搬機）」が製作され、試用した結果好成績を得る。これは昭和五年に改良され、昭和八年頃より実用化されて全国各地へ急速に普及していった。スクレーパーコンベヤーについては、昭和一〇年に住友忠隈でチェーンコンベヤーに替わって設置された。ベルトコンベヤーは昭和一〇年代より一部の炭鉱で使用された。

戦後にかけて、筑豊の炭鉱でもいっそうの機械化による生産能率の向上が図られた。昭和一〇年からは三菱方城・同飯塚でコールカッターに続きコールピックが使用され始め、カップ採炭は昭和二四年末より三井・三菱系などの大手炭鉱から導入された。昭和三〇年代の石炭不況に対し、



図5 コンテナスマイナー1CM
(米国JOY社製、昭和36年)

(注) 1. 写真所蔵：釧路市総務部地域史料室

麻生吉限ではドラムカッターを、麻生芳雄では昭和三六年にホーベルを導入し切羽の完全機械化を目指して合理化に努めたが、目立った進展はなく、以降筑豊では炭鉱技術の継承、発展を見ることはなかった。

一方、釧路炭田最大の炭鉱である太平洋炭鉱は、機械の導入に極めて積極的だった。機械化は、太平洋炭鉱発足直後から始まる。コールピツクは木村組釧路炭鉱末期（大正九年）に既に導入されている。大正九年のサリバンカッター、昭和三年のシェーカーコンベアのほか、同年の扇シームンスシュロッターも記しておきたい。それまでの自然通気・人力による扇風機では通気の悪化を伴うことから、それは採炭切羽の深部化には不可欠である。

戦後の機械化は、昭和二五年のジョイローダーに始まる。それまでの手積みから飛躍的に積み込み能力が向上した。翌二六年にはシャトルカー・マシントラックといった運搬機械が先行し、同年にドリリングマシン、

二七年にロツカーシヨベルが導入された。

大きな転機の一つが、昭和三年のコンテナスマイナー

(1CM、図5)の導入である。本来はルーム採炭用であるが、太平洋炭鉱では沿層掘進の中心として、その後も大型化と改良を加え、現在12CMが活躍している。

切羽での採炭は昭和三三年



図6 最初の自走枠 (OMKT 枠) (昭和42年頃)

(注) 1. 写真所蔵：釧路市総務部地域史料室



図7 SD採炭 最新型の自走枠とドラムカッター (平成9年)

(注) 1. 写真提供：釧路コールマイン(株)

からホーベルが導入された。その後、同四二年にSD採炭が開始される。SD採炭とは、シールド枠(S)とドラムカッター(D)を組み合わせた採炭方法である。導入当初はソ連製OMKT枠が使用されたが鉄柱一本のそれは支持力不足であり(図6)、二本、四本と鉄柱を増加させるほか種々の改良と大型化により安定した技術となり、現在に至っている(図7)。

前述のように稼行対象域では緩やかな傾斜で褶曲もなく、そのような炭層は欧米から導入した採炭・運搬機械の使用に向いている。戦後復興時、導入された輸入坑内機械が他炭鉱ではその使用が難しく、それらを太平洋炭鉱が買い集め使用した^⑩。

一般に、地質条件だけに太平洋炭鉱の機械化の理由を求めるとも多いが、それだけでは不完全である。「原料炭でなければ石炭にあらず」といわれた時代もあり、石狩炭田等と比して発熱用もやや劣る非粘結性



図8 太平洋炭鉱坑道図（閉山時）
 (注) 1. 太平洋炭鉱資料より石川作成

一般炭である太平洋炭鉱は常に安定供給と価格低減を求められ続けた。これらの実現には人員削減による労務費縮減が不可欠であり、機械化への大きな原動力となった。石炭は一般に付加価値のつけない商品であり、より効率的に、大量の石炭を採掘・運搬・選抜して商品化するためにも、それぞれの機械化が進められた。それまで炭鉱における坑内労働はもっぱら歩合制であったが、太平洋炭鉱ではいち早く月給制を導入した。合理化・機械化と歩合制は相反するという思想であり、生産のみを優先する従前の生産システムから、総合力による高能率生産システムへの転換を意味する。同時に、保安確保にも有利に作用する。また「全作

業方式」と呼ばれる多能工化も進められた。

炭鉱の組合は、「鉱員組合」と「職員組合」に分かれるのが普通だが（ときには「第二組合」も）、太平洋炭鉱は閉山まで「職・労一本」、一般社員も中間層も同一の組織であった。これにより、現場主義・現実主義の労使関係が形成された。「労使協調」と表現されることもあるが、ややもするとそれが御用組合的要素を持つのに対し、太平洋炭鉱においては労使が共に炭鉱と会社のあるべき姿を考え続け、一般に労働組合が忌避する機械化も、一定積極的に推進することで、安定生産と保安確保による炭鉱、つまり職場を守ることに向け努力を続けたと言つてよいだろう。これには相当な組合内部での「葛藤」があったが、その合意形成過程は、今後の重点研究テーマのひとつである。

これら機械化が生産増大に直結する自然条件と、それを進めやすい組織の条件がそれぞれに作用して、技術者が「機械マニア」とも自称する社風、「機械化炭鉱太平洋」が成立したのである。

(三) 友子制度

かつて炭鉱や鉱山に存在した「友子」についても触れておく。これは鉱山労働者の自主的な同盟・互助制度であった。古くから金属鉱山で組織されていた東北地方の鉱山から労働者が移入することにより、北海道の炭鉱でも組織されるようになった。

親分・兄分・子分があり、友子制度は相互扶助組織、交際団体、そして徒弟的技能集団でもある。「三年三月十日」の修行期間を経たのち、関係者の立ち会いのもと「友子取立式」を行い、「友子取立免状」を受けることで、はじめて友子に加わることができる。一生涯鉱山を渡り歩

一親分 備後國産 早田茂
 一親分 石後國産 徳永武雄
 一親分 波島國産 沢田初太郎
 一親分 初後國産 田坂庄一
 一親分 釧路國産 中秀入
 一親分 陸前國産 春山新一
 一親分 陸前國産 榎本茂春
 一親分 陸前國産 小野知彦
 一親分 陸前國産 野村知彦
 一親分 陸前國産 足本重天
 一親分 陸前國産 野中三郎
 一親分 陸前國産 湯谷三郎
 一親分 陸前國産 赤松合岩男
 一親分 陸前國産 佐々木重太郎
 一親分 陸前國産 佐藤庄次
 一親分 陸前國産 山本竹太郎
 一親分 陸前國産 若生康次
 一親分 陸前國産 香藤正治
 一親分 陸前國産 島津康次
 一親分 陸前國産 高橋長次
 一親分 陸前國産 菅野勇男
 一親分 陸前國産 七條清
 一親分 陸前國産 森 吳雄
 一親分 陸前國産 小笠原次
 一親分 陸前國産 松尾勇男
 一親分 陸前國産 新保次雄

右之者令取當額ニ於テ職務上ニ総合協之別任付テ付中
 由中一國産ノ上ニ取立任付職務上ハ一昔ヨリ山岡
 及七國産ノ總取立任付ノ功ヲハ勿クテ取立任付ノ功
 少年三月十日附一様置買ニ職務上取立任付ニ由リ
 右之者令取當額ニ於テ職務上ニ総合協之別任付中
 昭和十四年三月二十日附

帝國諸礦山諸工事
 同盟友子 御中
 北海道釧路市立博物館蔵
 太平洋炭鉱別荘
 同盟友子 御中

千鶴 萬龜

図9 太平洋炭鉱友子取立免状 (部分) (左:昭和14年、右:昭和10年)
 (注) 1. 釧路市立博物館所蔵

き働く「渡友子」と、他職業から転じた「自坑夫」の両系統があり、特に前者は当時の「飯場制度」とも密接に絡み合い、友子制度は明治中期から大正期の炭鉱労働の柱ともいべき存在であった。なお、太平洋炭鉱では「両友子」「同盟友子」として、「自坑夫」「自坑夫」合同であった。その後、昭和二年の健康保険法の施行、炭鉱労働の機械化・近代化に伴い、機能は薄れていった。太平洋炭鉱では同年、友子取立を会社指示で廃止し、共愛組合に移行したとあるが、釧路市立博物館は昭和八年、一〇年、一四年の友子取立免状を所蔵している(図9)。機械化や法整備だけで廃止できるものではなく、伝統として培われてきた「友子制度」は、戦時期まで存続していたのである。

一方、筑豊の炭坑においては、友子制度があまり認知されなかった。しかしながら筑豊でも、貝島満之浦炭鉱などのいくつかの炭鉱で、その存在が確認されている¹⁴⁾。また、筑豊の炭坑記録画を残した山本作兵衛も、記録画の中で伊予の銅山出身者である「金山坑夫」たちが、互助組合を組織していたと証言している¹⁵⁾。

筑豊で友子制度が浸透しなかった理由としては、北海道の炭坑開発は東北の鉱山出身者が主体的であったのに対し、筑豊では農村部出身が主体となっていたことが挙げられる。先の貝島満之浦炭鉱の友子の存在は筑豊では限定的であり、納屋制度が友子にかわって、筑豊では相互互助などの機能を果たしていたという指摘がある¹⁶⁾。しかし大手炭鉱が筑豊に進出し、昭和にかけて納屋制度から直轄制度へ推移すると、会社が直接従業員の福利厚生を手厚くした。昭和戦後は労働組合の設立によって、北海道の友子制度も急速に失われていった。

(四) 小結

古代より肥沃な農耕地帯であった筑豊と開拓地として近代から本格的な開発が始まった北海道・釧路では、自然環境や歴史背景がそれぞれ異なるため、同じ産炭地とはいえ石炭産業のあり方が違つのは当然である。豊富な石炭埋蔵量が国内外への石炭の供給を可能とした筑豊は、明治前期から農村部に資本が投下され、急激に発展した。一方で釧路は、消費地から遠く、埋蔵炭量や採炭条件について北海道内でも石狩炭田に比して評価が低かったこともあり、着手は早かったものの、小規模生産から緩やかな進展を遂げた。このことは両炭田における資本形態のあり方の違いと関係し、高い技術と大資本を携えた大手炭鉱の進出が、筑豊は明

治二〇―三〇年代、北海道・釧路では大正期になり、時期差を生じさせた。また、筑豊に見られた地場資本の成長が釧路では見られず、開拓の進展とともに大手炭鉱が鉱区を設定・買収する形で、釧路炭田の近代化が図られていった。両炭田の出炭量の大きな差に、これらのことが如実に反映されている。同時に、石炭（層）自体の質の違いから生じる、用途（供給先、販売経路）や採掘方法の変遷などの相違点が、両炭田それぞれの特徴として浮かび上がった。

昭和三〇―四〇年代の所謂「エネルギー革命」等による石炭合理化政策は、筑豊・釧路双方に大きな打撃を与えた。その中で釧路の太平洋炭鉱は、機械化による合理化を進めるのみならず、先進的な経営理念と保守重視の労使関係により、ついに国内唯一の坑内掘り炭鉱となった。このような太平洋炭鉱（釧路コールマイン）と比較することで、筑豊炭田を相対的に深く理解できるものと期待している。

また、友子制度のような、炭坑の互助制度でも大きな違いがみられる。加えて北海道・釧路と筑豊の相違は、炭坑固有の用語にも反映される場合がある。例えば筑豊や九州（及び山口県）の炭坑でいう「ボタ」が、常磐から北海道では「ズリ」と呼ばれている。「ズリ」は金属鉱山における用語として使われており、東北の鉱山出身者が多い北海道の炭坑では、そのまま「ズリ」と呼称したのである。なお、筑豊でも田川の香春岳における銅・石灰採掘では「ズリ」と呼んでいたようなので、「ボタ」は単なる方言の類ではない。鉱山では「ズリ」が基本で「ボタ」が例外的である。「ボタ」の呼称が何に起因するかは重要な問題なので、今後検討していきたい。その他、坑道の枠組みや道具の呼称についても差異がみられる。これらもあわせて、収集と整理を続けたい。

北と南の炭鉱にはやはり相違点がいくつかある。これは、すなわち地域の特徴である。南北石炭交流の大きな目的の一つとして、この「石炭比べ」を今後も継続していきたい。

三 石炭を介した筑豊と釧路の結びつき

(一) ライマンとその弟子（福本・石川）

ライマン（Benjamin Smith Lyman 一八三五―一九二〇）は、地質学鉱山学教師・地質測量鉱山技師長として明治六年、アメリカ合衆国より開拓役に招かれた。明治八年まで、北海道内の地質・資源調査と、鉱山技師の養成にあたった（釧路には明治七年）。ライマンが行った地質・資源調査は、その後の北海道の炭鉱・鉱山開発の大きな礎となった。また開拓使仮学校にて地質学を担当、鉱山学を担当したマンローとともに技師養成にあたった。野外実習を重んじたライマンらしく、調査にはその生徒の優秀なものを助手として同行させ、特に自主性を重んじたその教育方針が知られている。

明治九年に刊行した「日本蝦夷地質要略之図」は、日本最初の本格的・総合的な地質図として知られている。現在の地質学からみれば当然ながら粗いものではあるが、冬季の調査ができない北海道において、わずか3力年でその地質・資源を把握し、成果としてまとめたことは、ライマン（と助手たち）の高い能力を示している。地質学関係のお雇い外国人としては、東京帝国大学地質学教室の初代教授を務めたノウマンが「学問的」であったのに対し、ライマンは「実用的」であったのが対照的である。

ライマンはその後、内務省、工部省で全国の地質、特に油田調査にあたり、明治一四年に帰国している。

ライマンの弟子たちの中では、後に筑豊の石炭産業発展に大きく貢献した人物もいた。¹⁷⁾ 明治五年に開拓使学校の学生となり、ライマンの鉱物・地質調査に同行した稲垣徹之進は、卒業後工部省に入り筑豊の炭層調査後、明治一五年から三池、唐津などの測量調査を手がけた。明治二二年には官を辞し、筑豊の大辻炭鉱に入った。その後筑豊石炭鉱業組合の三代目総長に就任、明治三二年には安川敬一郎に招聘されて明治鉱業の専務となり、筑豊炭田の発展に大きく貢献した。稲垣と同じく開拓使学校学生だった島田純一は、明治七年にライマンの調査に同行した。その後明治一三年には北海道において幌内炭坑の開坑に従事し、幾春別などで炭層を発見した。明治一六年以降は工部省鉱山局において日本坑法改正案の調査委員として活躍し、明治二五年には福岡の鉱山監督署技師、同二七年には東京鉱山監督署長を歴任した。同年二月、官を辞して三井鉱山と関わるようになり、三池炭坑事務長を経て、明治三〇年には筑豊の山野炭坑（現嘉麻市）の事務長となった。筑豊石炭鉱業組合では常議員も務めていた。そして開拓使学校の学生ではないが、開拓使の雇い人だった安達仁造もライマンの調査に同行した。安達は開拓使の外国人教師館のボーイとして働くなどの苦勞人で、ライマンに従って全国の鉱山を巡回し、明治一六年にはアメリカ・ペンシルバニア州に自費で渡って地質鉱山局測量係を務め、明治二二年にはアメリカ鉱山学士会院の会員に当選したが、同二二年二月には辞してヨーロッパ諸国を歴遊し、同年八月に日本へ帰国した。その後は日本郵政会社の技師として筑豊の勝野炭坑に入り、坑主変更後もそのまま同坑に在籍し、稲垣の後を継いで筑豊石

炭鉱業組合の四代目総長となった。

当時最先端の鉱山技術・知識をライマンから学び、日本鉱業界の先達として多くの弟子たちが活躍した。筑豊も同様であり、北海道の大地から学んだ先駆者たちが、筑豊炭田の礎を築いたのであった。

(二) 三井鉱山と田川・釧路（福本）

大正九年に誕生した釧路・太平洋炭硯は、創業時から昭和戦後の財閥解体で一山一社の体制になるまで、三井鉱山の強い影響下にあった。したがって、田川（三井田川鉱業所）と釧路（太平洋炭硯）に、三井鉱山を介した人のつながりがあったことは想像に難くない。¹⁸⁾

現在でも筑豊・田川のシンボルとなっている旧三井田川鉱業所伊田竪坑櫓及び同第一・第二煙突（二本煙突）は、三井鉱山が明治三八〜四三年に開鑿した大竪坑・伊田竪坑の遺構である。伊田竪坑の開鑿は三井鉱山の技術者である牧田環により立案・計画がなされ、佐伯芳馬・田邊儀助・小林寛の三人が中心となり、五年三ヶ月にわたる難工事を成し遂げた。このうち、

牧田及び佐伯と田邊は、釧路の太平洋炭硯でも重要な役割を果たしている。

田邊儀助
（一八六七）

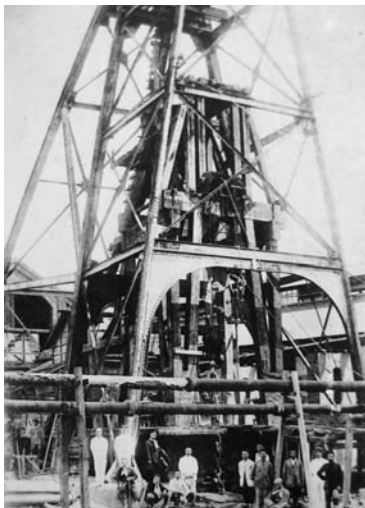


図10 伊田竪坑四尺層着炭記念
（明治42年、右端が田邊儀助）

（注）1. 『小林寛遺稿集』より

?)は、三井入社後は三池炭鉱にて明治三〇年より始まった万田坑の開鑿工事に従事する。日露戦争(明治三七〜三八年)に出征し、復帰後は万田坑開鑿の経験を買われ、明治三八年から開鑿工事長として田川の伊田豎坑開鑿工事に従事する。その後、三井田川大藪坑主任(坑長級、大正三〜五年)を経て、大正五年、釧路の三井釧路炭鉱(別保)に赴任する。大正九年に合併誕生した太平洋炭鉱では、同鉱釧路炭業所初代所長(大正二〜一四年)、及び釧路臨港鉄道株式会社初代社長(大正二〜二年)も兼務した。釧路における田邊は、技術はもちろん、人格者として人望も厚かったようである。昭和三〇年一〇月二五日発行の太平洋炭鉱機関紙「太平洋」(第一二二号)の「旧別保坑の思い出を語る座談会」では、青年教育に尽力した田邊の仁徳が偲ばれている。¹⁹⁾

佐伯芳馬(一八七二〜一九三二)は、明治二八年、帝国大学冶金学科(現東京大学工学部)を卒業後三井に入社、技術エリートとして活躍した。田川では三井田川伊田坑主務として、伊田豎坑開鑿研究のため半年間イギリスへ派遣される。帰国後、明治三八年六月から始まった伊田豎坑開鑿工事では、開鑿主任として工事の指揮をとった。

その後、三井田川の二代目所長(明治四一〜大正八年)となり、大正八年より三井鉱山本店(東京)へ栄転して、鉱務部長(大正八〜一二年)や常任監査役(大正二一〜昭和五年)を歴任する。この時本店常任監査役と兼務して、釧路の太平洋炭鉱では監査役(大正一五〜昭和四年)も務めた。

ところで、佐伯は出身の帝国大学冶金学科で、三井鉱山の牧田環・西加二太と同窓だった。佐伯と同じく両氏とも三井鉱山に所属して太平洋炭鉱と関わりを持っている。西は大正二年に北海道空知の三井砂川出張

所の初代所長を務め、太平洋炭鉱が創業した大正九年から同鉱の常務取締役就任している。そして三井鉱山の重鎮だった團琢磨の娘婿であり、片腕として三井鉱山の礎を築いた牧田環(一八七二〜一九四三)は、三井の筑豊進出の足がかりをつくった人物である。明治二九年に山野(現嘉麻市)の鉱区を買収し、明治三年には田川採炭組から鉱区を買収した。田川の伊田豎坑開鑿の企画・立案を行い、佐伯の補佐役として田邊と小林を三池から田川に呼び寄せた。その後牧田は、大正二年より三井鉱山本店取締役(昭和九年から取締役会長)となり、太平洋炭鉱では創業時の大正九年から相談役を務めている。

三井系の炭鉱では、牧田・佐伯・西といった帝大出身の技術者が支えていた。太平洋炭鉱は創業時から、当時の鉱業界をリードした三井鉱山の影響を、技術面や人事面で大きく受けてきた。筑豊の三井田川と縁が深い人物も太平洋炭鉱に関わっており、筑豊での経験が釧路で活かされてきたことが推測される。特に田邊儀助は、現場の技術者、あるいは近代的な炭鉱風土の形成で、田川と釧路に大きな足跡を残している。

その他、田川と釧路を結んだ三井鉱山の技術者としては、佐伯の後を継ぎ三井田川の三代目所長(大正八〜昭和四年)となった不破熊雄が、三井鉱山本社取締役と兼ねて、太平洋炭鉱監査役(昭和五〜六年)となっている。また、太平洋炭鉱釧路炭業所の五代目所長(昭和一七〜一九年)を務めた河原崎始太郎は、昭和一九年より筑豊へ転任し、八代目の三井田川炭業所所長を務めた。このような三井鉱山を介した田川と釧路の人的な交流は、管理職・技術者レベルから、次項で紹介する昭和戦時中の「急速転換」では、多くの一般鉱員が中心となる。

なお、佐伯・田邊とともに伊田豎坑の開鑿工事に従事した小林寛(一

八七六（一九三九）は、大正九年に三井鉱山が経営する台湾の基隆炭鉱へ、基隆炭鉱取締役兼同鉱業所所長として赴任している。基隆炭鉱は大正七年に三井鉱山と地元の顔家が合併して成立した炭鉱であるが、顔雲年は釧路の木村久太郎（太平洋炭鉱初代社長）とビジネスパートナーであり、太平洋炭鉱創業時には同社の株を五〇〇〇株保有していた。大正八年に基隆炭鉱は台湾の木村鉱業を買収して、牧田も基隆炭鉱の取締役会長として経営者に名を連ねている。間接的ではあるが、台湾においても三井鉱山を介して釧路と田川が繋がった。

（三）戦時「急速転換」（石川）

昭和一九年八月十一日、「樺太及釧路に於ける炭鉱勤労者、資材等の急速転換の件」が閣議決定された。理由を「戦局の推移に伴ふ海上輸送力の逼迫に因り樺太及北海道釧路地方に対する配船は今後殆ど之を期待し得ざる現状に鑑み右両地方に於ける炭鉱の徹底的整理を断行しその保有する勤労者、資材等は挙げて之を他の輸送力の裏付ある地方の炭鉱に転換せしめ戦力化し得るべき石炭の増産を促進し現下の急迫せる石炭需給状況を打開し以て決戦遂行に必要な戦力増強の緊急要請に応へんとするに依る」とあり、戦局の悪化による配船困難が、京浜地区など需要地までの海上輸送距離が長い釧路・樺太地区の炭鉱を保坑・休坑とさせたのである。

釧路地区では、尺別・浦幌・本岐・太平洋別保・雄別（主として苔樋区域を除く）が休坑、太平洋春採・雄別（主として苔樋区域）・庶路が保坑に指定され、「内地勤労者」が三〇〇〇名（うち一〇〇〇名は努力目標）、「半島労務者」三〇〇〇名の計六〇〇〇名を転換対象とした。

「樺太及び釧路地区炭鉱勤労者、資材等の急速転換実施要綱」では、詳細に転換計画が記されている。釧路の対象各炭鉱から九州への転換計画を、表1に示す。

終戦後、転換労働者は自発的に、あるいは会社指示の後、そのほとんどが釧路炭田の転換前に所属していた炭鉱に戻っている。

これまで、釧路炭田を扱った研究の中でも必ず触れられてきたが、移動や転換先の炭鉱での様子などを記録したものは少ない。一方で、樺太から常盤・九州への移動については、矢野牧夫氏の詳細な研究がある²⁰。

表1 「急速転換」による労働者の移動（釧路関係分のみ）

| 会社名 | 炭鉱名 | | 労務者数 | [転換前] | | | [転換先] | | | 会社名 |
|--------|----------------|---------------|-------|-------|-------|---------|-------|-------|--------|------|
| | | | | 転出数 | うち半島人 | 受入炭鉱 | 受入数 | うち半島人 | 受入後員 | |
| 太平洋炭鉱 | 春採 別保 | 保坑 | 2,278 | 1,290 | 470 | 三池 | 1,290 | 470 | 22,155 | 三井鉱山 |
| | | 休坑 | 1,331 | 970 | 350 | 田川（福岡県） | 970 | 350 | 12,625 | |
| 雄別炭鉱鉄道 | 雄別 | 保坑 | 2,204 | 1,500 | 890 | 鯨田 | 200 | 200 | 4,325 | 三菱鉱業 |
| | | *苔樋区域 以外休坑 | | | | 上山田 | 200 | 200 | 3,348 | |
| | | | | | | 飯塚 | 200 | 200 | 4,623 | |
| | | | | | | 勝田 | 900 | 290 | 2,518 | |
| | | | | | | 新入 | 780 | 410 | 4,049 | |
| 明治鉱業 | 尺別 浦幌 庶路 | 休坑 | 1,047 | 780 | 410 | 方城 | 690 | 430 | 4,418 | 明治鉱業 |
| | | 保坑 | 819 | 530 | 320 | 赤池 | 530 | 320 | 5,366 | |
| | | 本岐 | 204 | 120 | 30 | 豊国 | 120 | 30 | 1,816 | |
| 東亜鉱工 | 白糠 | 廃止 | 276 | 180 | 0 | 田川（山形県） | 180 | 0 | 1,986 | 東亜鉱工 |
| 計 | | | 9,064 | 6,060 | 2,900 | | 6,060 | 2,900 | | |

(注) 1. 「半島人」の表現は、当時の状況を示すために原資料のまま用いた
 2. 「樺太釧路整理炭鉱勤労者転出先調」（茨城県立歴史館所蔵）より作成

著者らと、佐藤富喜雄氏（太平洋炭鉱管理職銚路倶楽部）によって調査を進めており、太平洋（春採・別保）、明治庶路、尺別の各炭鉱からの転換経験者から聞き取りをすることができた。筑豊では、尺別炭鉱から新入炭鉱へ転換後、戦後も残留した経験者から話を聞くことができた。今後、さらに聞き取り等を行っていく予定であるが、経験者の高齢化（終戦時一八歳でも、現在すでに八二歳となる）により急速に記憶が失われつつあるところで、早急な対応を考えている。

ここで、一例として、聞き取りで得られた平井重秋氏（大正一五年生まれ）の「急速転換」の経験を記す。

昭和一四年、測量見習として尺別炭鉱に入社後、昭和一七、一八年、札幌石炭坑技術員養成所入所。昭和一九年、助手係員になる。八月の「急速転換」による休坑後、第一団として九州へ転換される。「九州炭増産尺別突撃隊」という腕章をして新尺別駅から列車に乗車。専用列車で九州へ向かったが、途中乗り換えた記憶はない。車両の班長を務めた。実際は弁当配布などの雑用であった。荷物はバックひとつで、着替え、安全帽、個人持ちの測量機器などを持参した。新入炭鉱（直方市）へ到着。尺別からの転換者は六坑・七坑・上新入坑・植木坑が担当で、平井氏は上新入坑・植木坑を担当した。植木坑は「夫婦がランプでトロッコを押すような」小ヤマであった。尺別では磁北を基準に坑内測量を行っていたが、新入炭鉱は真北が基準であり図面が合わなくなることもあった。寮は新入六坑にあり二人で一部屋、寮での尺別出身者は四人のみであった。上新入坑へ通勤した。主食はさつまいも入り米飯である。一九年一〇月、召集令状が実家に届いたがその後取り消され初山別村（北海道道北地方）の実家へ戻る。二〇年四月から再び新入炭鉱で勤務後、同

年六月に再度召集され、旭川へ入営後、樺太の配属となり終戦を迎える。これまでの聞き取りから、いくつかの個人による差異がある。例えば列車での移動について、「九州まで一度も下車しなかった」「青森では旅館に泊まった」というそれぞれの記憶では、扱いに相当の差異があるといえるが、はたしてどうだったのか。「品川駅で炭鉱会社の本社から慰問があった」「品川で列車が留め置かれ、車内で一夜を過ごした」と、品川駅での記憶が複数得られたが、残されている時刻表にはそのような長時間停車の記載はない。当時の状況を考えれば、計画通りに人員輸送が行えなかった（特に本州以南において）ことも当然あるうし、同時に「記憶違い」もあるかもしれない。転換先炭鉱での指揮命令系統はどうだったのか、前述の「磁北と真北」のような技術的差異はどうであったのか、労働者の一部が残された銚路の保坑・休坑はどんな状況だったのか、終戦直前の昭和二〇年八月初頭に庶路炭鉱が再開という記録²¹など、疑問がまだ多くある。

転換先での記憶を収集できないかとも考えているが、当時は労働力の流入入が激しく、難しさがある。これは、まだ研究途上であり、今後も文書と記憶を突き合わせなど検証を進め、さらに稿を改めて報告したい。

四 ヤマの記憶継承——博物館の活動から

（一）田川市石炭・歴史博物館（福本）

閉山後三〇年を過ぎた筑豊では、隆盛を極めた炭鉱の施設が次々と取り壊されて風景を一変し、炭鉱マンや在りし日の炭鉱を知る人々も高齢化が進み姿を消していく。田川市石炭・歴史博物館では、失われていく

ヤマの記憶を少しでも後世に伝えるべく、企画展を始めとした様々な活動を行っている。特に、平成二〇年度からは「炭坑の語り部」と題し、炭坑経験者の体験談を記録する事業をはじめている。元炭鉱マンや炭坑に関わった方々を講座にお招きし、当時の様子をお話していただいている。現在の筑豊では見ることができない、経験に基づいた臨場感溢れる炭坑の話は、炭坑を知らない世代にとって新鮮で好評を得ている。また博物館では、石炭を知らない子供たちに対し、石炭を実際に燃やしてその独特のにおいや燃焼を体験するイベントも開催している。語り部の方々は学校にも出向き、子供たちに炭坑の話をお聞かせしている。また、学校の先生方についても、財団法人石炭エネルギーセンターから講師をお招きして、石炭の勉強会も行っている。

あわせて田川市では、現在も当時のまま保存されている旧三井田川鉱業所伊田竪坑槽と同二本煙突を、炭都・田川のシンボルとしてまちづくりに活用している。平成二〇年には二本煙突築百周年を記念して、竪坑槽とともにライトアップを行い、新たな観光資源として活用している。また、日本を代表する民謡・炭坑節は、田川市の二本煙突がモデルとされており、田川市では炭坑節発祥の地を広く発信すべく、毎年秋に「TAGAWA コールマイン・フェスティバル」炭坑節まつり」を開催している。このような産業遺産の活用は、近年筑豊では活発になされており、筑豊各地に点在する遺産を線でつなぎ、地域振興や観光に活かす活動が展開されようとしている。

これまで筑豊の炭坑は、得てして負の側面のみが強調される感があったが、近年では炭坑が地域の誇りとして見直されようとしている。それは、「炭坑の仕事は、それはきつくて何度もやめようと思ったけど、炭

坑のおかげで生きてこれた」と笑顔で語る、語り部の方々の思いでもある。炭坑が姿を消した筑豊に、わずかに残された産業遺産は物言わぬ建造物に過ぎない。語り部たちの炭坑に対する温かい思いをもってはじめ、命を吹き込むことができる。「生きた」炭坑の遺産を、確実に次の世代に継承していくことが、博物館に課せられた役割である。

(二) 釧路市立博物館（石川）

稼行中の炭鉱がある釧路に所在する博物館として、「石炭のあるマチ、あったマチ」だからできる事業展開を進めている。平成一九年度から開始した「現場で学ぶ『石炭基礎講座』掘るだけでは終わらない」は、タイトル通り博物館ではなく毎回「現場で」実施している。石炭をテーマにしたこの種の取り組みは、採炭ばかりをテーマにしがちなこともあるが、この講座では石炭産業を上流（生産）から下流（消費）まで多角的に取り上げることが第一としている。また、我が国、そして地域を形づくり、支え、そして現在はベトナムや中国へ技術移転が進められている石炭技術を「技術資産」と捉え、その蓄積場所である釧路について、石炭の過去・現在・未来を市内外の多くの人のひとに理解していただけるように展開をしている。平成二一年度までに一〇回を開講した。これまでの講座内容は以下の通りである。

「平成一九年度」 「選ぶ」：選炭工場と暖房炭工場（選炭の仕組み）
「運ぶ」：太平洋石炭販売輸送臨港線（石炭輸送鉄道） 「使う」：日本製紙釧路工場（環境配慮型石炭火力発電所と製紙工程） 「住まう」：雄別炭砒跡（特に炭鉱集落の生活） 「動かす」：JR釧路運輸車両所（蒸気機関車）

「平成二〇年度」 「伝える」：産炭国石炭産業高度化事業（炭鉱技術研修） 「支える」：炭鉱を支える裏方 「探る」：大正期の雄別炭砒の遺構、地質調査入門

「平成二二年度」 「守る」：鉱山保安と改正鉱山保安法 「澄ます」：尺別炭砒跡

関係各社と「雄別炭礦の産業遺産を守る会」の協力によって実施した。今後も、継続的な実施を予定している。年を追うごとに開催数が減少しているが、これは石炭産業と直接あるいは間接的に関係がある他産業、釧路地域の特性である資源産業を理解していただけるように、「林業」や「釧路港」に関する講座も並行して実施するようになったのが理由である。参加者は市内からだけでなく、札幌や東京方面等、遠方からの参加も毎回あり、また希望者多数のため現在は抽選制をとっている。

企画展も、平成一八年度「タキイシの火は消えず 石炭採掘一五〇年展」（北海道新聞釧路支社と共同開催）、同一九年度「阿寒・音別・釧路の魅力再発見 内で雄別炭礦・雄別鉄道を重点的に紹介、同一〇年度は「軍艦島へ消えた炭鉱集落」、「炭坑（ヤマ）の語り部 山本作兵衛の世界」（田川市石炭・歴史博物館と共同開催）、同一二年度「炭鉱（ヤマ）のくらし・マチの記憶」（文化庁「美術館・博物館活動基盤整備支援事業」に採択）、「交流企画展 北と南を結ぶヤマ」（田川市石炭・歴史博物館と共同開催）と毎年継続的に開催している。当館だけでなく、炭鉱OB、地域内、他地域の関係機関との連携により、予算的・人的不足をカバーしているが、特に田川市石炭・歴史博物館との交流は、当館並びに釧路市民に対し、地域を再度見直そう、他地域との交流を進め学び合おうというきっかけを提供することができた。確実に石炭産業への取り

組みに対する評価とその深化への要望は高まっていると感じられる。炭鉱OBや釧路市立博物館友の会会員が筑豊や田川市石炭・歴史博物館を訪問するなど、交流を深めている。また、北海道新聞・西日本新聞連携による取材と記事掲載がその強力な後押しとなったことを、ここに記しておく。

「石炭基礎講座」、石炭に関する企画展等を継続的に実施することで、経験の掘り起こしのかきつけとし、市民との協働を深め、博物館が「世代間交流」の場、「伝えたい」思いのある市民が活躍する舞台を、提供することを今後も目標としたい。田川市石炭・歴史博物館の語り部事業は非常に参考となり、当館でも実施を検討している。

五 南北石炭交流の今後の展望（福本・石川）

博物館の南北石炭交流は、学芸員の何気ない一通のメールから始まった。メールでの情報交換から学芸員の現地調査まで発展し、博物館同士の交流から炭鉱OBとの交流までに至ったことは、当初は予想もしなかった。しかし、この南北の石炭交流が、実は百年前から断続的にあった事実が判明したことは、存外の喜びであった。

過去の釧路と筑豊の人的な交流は、炭鉱OBたちによって掘り起こされた。釧路での「山本作兵衛」展の際、会場を訪れた元炭鉱マンの「急速転換」に関する一言がきっかけだった。筑豊の炭坑が描かれた記録画から、戦時中に「転換」させられた筑豊での記憶が蘇ったという。また、田川の資料を手にした釧路・太平洋炭砒OBからは、田邊儀助の釧路での足跡を知ることができた。田川の企画展で紹介した、機械化された釧

路の炭鉱を見た筑豊の炭鉱OBの感想から、改めて筑豊と釧路の炭鉱の特徴を知ることができた。

筑豊と釧路は距離にして遠く離れてはいるが、同じ産炭地ということ、明治からの石炭を介した南北の交流が確かにあり、それを土台として現在の博物館交流がある。筑豊と釧路から、石炭の過去と現在を補充すると同時に、お互いの相違点を以て自らの地域的特色を再確認する。炭鉱OBと学芸員による公私ともの交流から多くの記憶が得られた。取り組むべき課題はまだ多いが、南北共同で取り組むことによって、石炭産業に関わった人々の隠されたドラマが、今後も発掘できることを楽しみにしている。

昨今、博物館にはまちづくりへの積極的参画が求められているが、まずは「素材」と、市民協働の「舞台」の提供をこれまでに以上に進めていくべきだと考えている。失われつつある「ヤマの記憶」を少しでも後世に伝えていくことが、産炭地に所在する地域博物館の使命でもある。

文末となったが、両博物館のこの取り組みに対し、深い理解とご協力をいただいた炭鉱OB、市民、研究者、報道機関、炭鉱会社など多くの皆様に厚く御礼申し上げる次第である。

注

(1) 本文中の「炭コウ」の標記について、機械化以前の手掘り時代や文化などの概念を強調する場合は「炭坑」、近代的で機械化が進んだものを「炭鉱」と概ね統一した。ただし、「太平洋炭鉱」など社名・固有名詞を表す場合は、この限りではない。

(2) 大蔵省一八八五年「開拓使事業報告」

(3) 榎本武揚「オホツナイヨリ広尾及び根室ニ至ル」北海道大学付属図書館北方資料室 蔵

(4) 本文中の炭田ごとの出炭量の数値は、図2文献によっている。ただし、昭和一〇〜一五年は福岡県を一本として出炭量を計上していることから、昭和一五年の出炭量の最高出炭量は、直方市石炭記念館展示図録「石炭と炭鉱——一〇〇年の歴史を語る」記載の数値によった

(5) 寺島敏治一九八八『釧路の産業史』（釧路叢書）、など

(6) 昭和四八年の経営協議会で「釧路炭鉱の収束（閉山）」方針を明らかにした（太平洋炭鉱労働組合二〇〇四『解散記念誌 ヤマの絆』）

(7) 太平洋炭鉱一九八〇『六〇年のあゆみ』、ほか

(8) 筑豊石炭礦業史年表編纂委員会一九七三『筑豊石炭礦業史年表』二二〇頁

(9) 注7文献および高崎守氏（太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部）の談話による

(10) 高崎守氏・佐藤富喜雄氏（太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部）の談話による

(11) 太平洋炭鉱労働組合二〇〇四『解散記念誌 ヤマの絆』

(12) 太平洋炭鉱一九八〇『六〇年のあゆみ』

(13) 福沢重利一九七六『筑豊地方の炭鉱における友子同盟について』、『エネルギー史研究』七 原資料は直方市石炭記念館にて展示中

(14) 村串仁三郎二〇〇六『大正昭和期の炭夫同職組合「友子」制度』二四三〜二八〇頁、など

(15) 福本寛二〇〇九『山本作兵衛炭坑記録画と筑豊の採炭技術』、『田川市石炭・歴史博物館館報』第二号

(16) 市原博一九九七『炭鉱の労働社会史——日本の伝統的労働・社会秩序と管理——』三七〜四〇頁

(17) 稲垣徹之進・島田純一・安達仁造の略歴については、高野江基太郎一八九八『筑豊炭礦誌』を参照した

(18) 以下、三井鉱山関係者の経歴は、寺島敏治二〇〇一『三井鉱山（株）にお

る炭鉱会社支配のあり方——本店と支店化が進む台湾・基隆炭鉱と北海道
太平洋炭鉱の場合——」『金属鉱山研究』第七九号、『田川鉱業所沿革史第一
巻第一編総説一』(三井文庫所蔵)、『本店関係主要人事異動(社報より抜
粋)』(同所蔵)、『三井鉱山五十年史稿巻一総説』(同所蔵)、『小林寛遺稿
集』を参照した

太平洋炭鉱労働組合二〇〇四『解散記念誌 ヤマの絆』
白糠町史編集委員会一九八三『白糠炭田に灯は消えず』(叢書しらぬか5)
北海道通産産業局一九九三『北海道の石炭』
北海道開拓記念館一九九五『ライマンコレクション展』(第四一回特別展図録)

- (19) 佐藤富喜雄氏よりご教示
- (20) 矢野牧夫二〇〇六『昭和一九年夏 樺太の炭鉱閉山』(自費出版)
- (21) 明治鉱業一九五七『社史』による

【参考文献】

(筑豊関係)

- 筑豊石炭礦業史年表編纂委員会一九七三『筑豊石炭礦業史年表』
- 田川市史編纂委員会一九七四『田川市史 上巻』
- 田川市史編纂委員会一九七六『田川市史 中巻』
- 佐谷正幸二〇〇〇『石炭採掘技術の変遷』『嘉飯山郷土研究会会誌』第一四号
- 長弘雄次二〇〇五『筑豊炭田における「筑豊炭坑の採掘・採炭の歴史」について』『嘉飯山郷土研究会会誌』第一九号
- 筑豊近代遺産研究会二〇〇八『筑豊の近代化遺産』

(釧路関係)

- 東京地学協会一九六〇『日本鉱産誌 石炭』硯書房
- 釧路炭田研究会一九七四『釧路炭田』(釧路叢書一四)
- 矢野牧夫・丹治輝一・桑原真人一九七八『石炭の語る日本の近代』(そしてついで
文庫三二)
- 寺島敏治一九八八『釧路の産業史』(釧路叢書二六)
- 太平洋炭鉱一九八〇『六〇年のあゆみ』
- 太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部二〇〇二『年表 太平洋炭鉱の八十二年』